

## 理科が危ない

「愚民政策」、文部科学省が今進めつつある教育「改革」を著者はこう表現する。全く同感である。来年四月より実施される学習指導要領により、学校で教える内容が激減する。特に理科が。一九九八年七月、このプランが教育課程審議会会長三浦朱門氏から時の文部大臣町村信孝氏に恭しく提出されたことを知って、私はある種の脱力感に襲われた。この国の未来を左右する重大な決断が、少数の「お偉いさん」たちによって密室で行われる。恐ろしいことだ。

現在、高校における物理履修率はすでに全生徒の20%ほどまで落ち込んでいる。今、社会の中核にいる四十一―五十歳代が高校生であった七〇年代前半は、生徒の92%が履修していた。そして来年。中学理科からは、比重も色も物理的仕事の概念も電解質（イオン）も直流―交流も運動法則もエネルギー・熱も電波も原子も、これ以外の書ききれない多数の項目と共に、消え去る。自分たちの世界を科学的合理的視点で見るとる者は少数者となるであろう。再び懐疑主義と神秘論がはびこり、「愚かな」大衆を支配する

### 教育「改革」への危機感

ことは「赤子の手をひねる」ほど簡単な世の中が来るだろう。それでいいのか。

ポストゲノムの時代の幕開けとなり、バイオ系特許の大半が欧米に押さえられていることが日本の産業を窒息させると危惧する声は大きい。科学技術創造立国によってそれを跳ね返すというが、それどころかこのまま行けば釣り銭の計算もできない若者を大量生産することになる。受験勉強は必要。暗記も大切。一定の「画一性」も教育にはあるべき。知識なくして思考なし。細かいところまでうるさく指導せよ。著者のこうした意見に私は賛成する。学力の低下は知性の喪失につながり、モラルを低下させ、社会の活力を削ぐ。「理科が危ない」の一連の主張は、日本の物理学の輝かしい過去（一）がどのように築かれたか、その歴史的検討によって一段と説得力を増す。「理科を歩む」は十分にその任を果たしている。（新曜社、各1800円）

◇えざわ・ひろし＝一九三二年、東京生まれ。学習院大学理学部教授（理論物理学）。

江沢洋著

## 理科を歩む